

元気の出る情報・交流誌

手をつなぐ

2026

5月

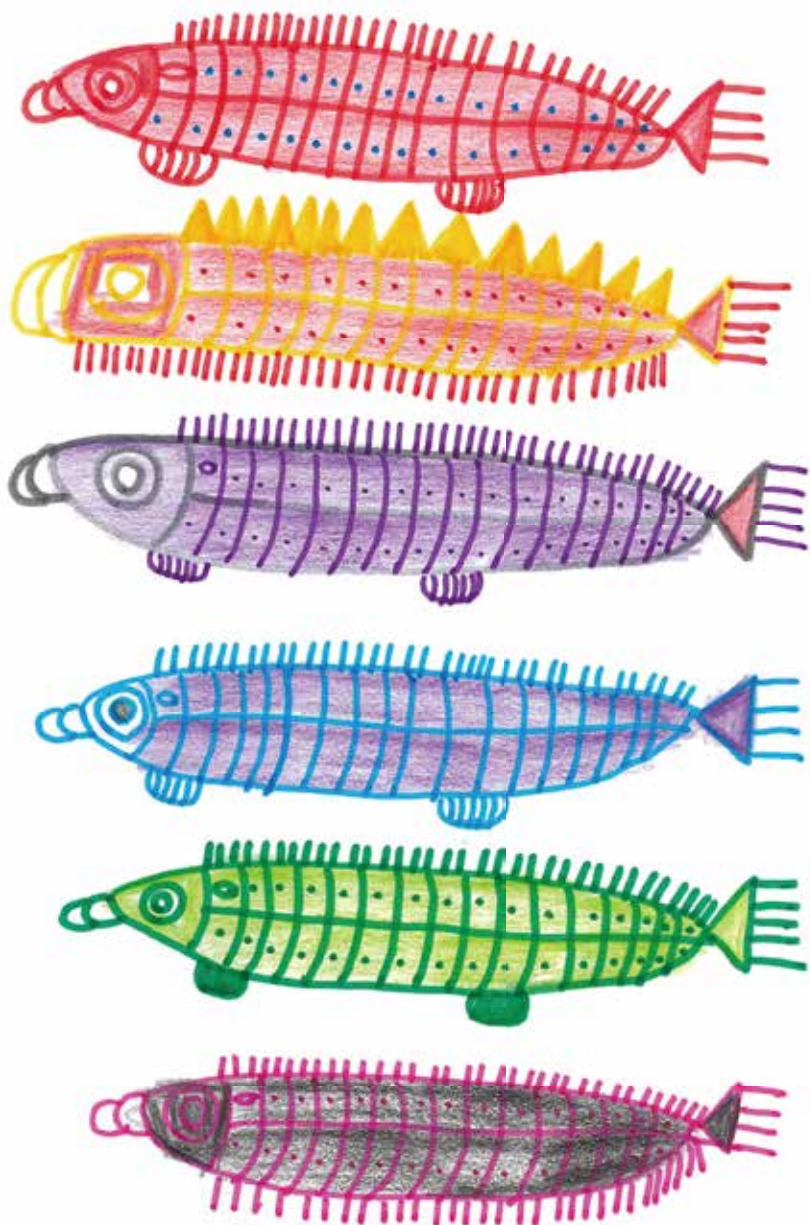
No.843

特集

さあ、旅に出よう！

今月の問題 — 成年後見制度の抜本見直しに向けて(1)

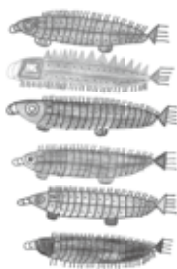
ひびき — 山上庄子(Palabra株式会社代表)



CONTENTS

手をつなぐ

2026.5 [No.843]



表紙絵「さかなの兄弟」

■古志野亮太(こしの・りょうた)

44歳

■島根県安来市

社会福祉法人せんだん会

梨の木園

■作者からのひとこと

ぼくは、絵を描くことが好きで絵の教室に通って油絵を描いています。教室がお休みの時は、家でサインペンや色えんぴつで、魚や、カニ、虫などを描きます。とても楽しいです。

できないんじゃない やらせていないだけ ~親が変われば子は必ず変わる~ [第8回]
始まった、父と子の“二人三脚” 石村和徳

02 わたしたちも言いたい
ルールって本当は何だろう? S・Y

05 視点いろいろ 気持ちいろいろ みんな、まる。[第8回]
見てきてって言ったから 津島つしま

07

特集

さあ、旅に出よう!

ひろがるユニバーサルツーリズム

08 ・「行ける旅」から、「行きたい旅」へ 中村 敏

10 ・丹波篠山からの実践報告-ユニバーサルツーリズムを、暮らしの延長に-
山中信彦

12 ・2025大阪・関西万博「障がい者の文化芸術ユニバーサルツーリズム」
を実施して 三宅玲子

未来へつなぐ旅の取り組み

14 ・空の旅のハードルを越えるために 吹田奈穂子

16 ・「ひまわり号」の旅 春口明朗

18 わたしの旅ものがたり

まちからはじまる、やさしい旅

22 ・障害があっても、気兼ねなく。

そんな場所の目印「観光施設における 心のバリアフリー認定制度」

24 ・「行ってみて! ダメなら帰ろう!」 善川夏美

26 ・旅に出よう「つまらない」を「楽しい」に変える魔法 渡辺理津子

29 今月のオススメ

30 ひびき

より多くの人へ、作品の深みへ、“届ける” 山上庄子

32 対話の潮騒~Z世代が思いめぐらす障害と福祉~ [第2回]

親がいつまでも子ども扱いすること どう思う? 障害者のリアルに迫るゼミ

34 今月の問題

成年後見制度の抜本見直しに向けて (1)

38 育成会だより

啓発キャラバン隊研修会を開催しました 立原麻里子

40 暮らしを支える福祉の制度 [第62回]

成年後見制度について その8 ~望まれる制度のあり方3~ 又村あおい

42 中央の動き

令和8年度障害福祉サービス等報酬改定の概要が示されました

45 ニュースのじかん

ちいきのいいもの [第55回]

新宿産天然はちみつ「新宿しQハニー」 公益財団法人新宿区勤労者・仕事支援センター

ルールって本当は何だろう？

東京都

S・W
Y

私は3年前に作業所に入ったのは良かったけど、

ルールがあることを知らなかった。

先輩にルールを教えてもらったけど、

ルールって本当は何だろうと疑問に思った。

「全部職員が言うんだから、余計なことを言わないで」とか、

「困ったことがあったら職員や先輩に先に相談して」とか。

いつも職員が仕事の説明を全部している。



「みんなで頑張ろう」と私が言ったら、

先輩には「なんで余計なことを言うの」と

言われてしまった。

ルールを守らないとやめなさいといけないうて、

先輩から聞いた。

それと、みんながいるのに、

職員が誰かのことを話しているのが気になってしまう。

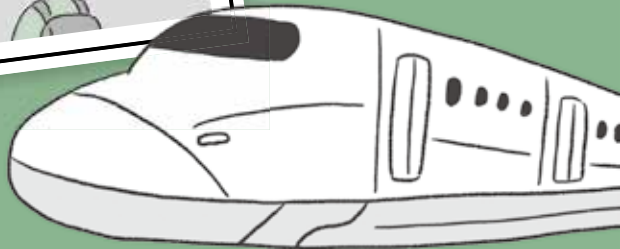
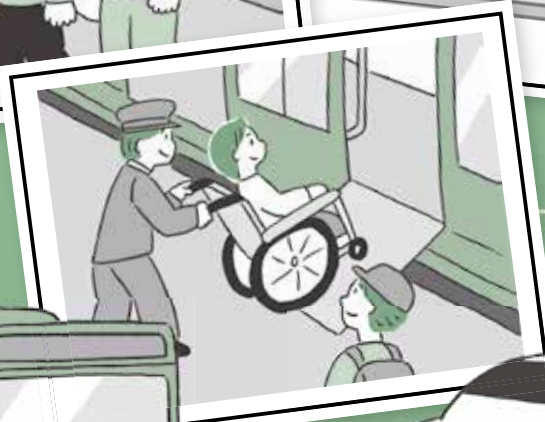
でも、先輩も職員が話していることを気にしていた。

私は心の中では言いたかったのに、どうしようと悩んでいた。



「わたしたちも言いたい」ではみなさまからのお便りを募集しています（宛先は48ページ）。
生活のこと、仕事のこと、暮らしのことなどふだん感じていることを書いてお送りください。

さあ、旅に出よう!



旅は、少しの工夫や勇気でぐっと身近になります。
知的障害のある人や家族にとっては、楽しみと同時に不安もありますが、
事前の準備や周囲の理解によって、そのハードルは少しずつ下げることができます。
今回は、実際の体験談や役立つ情報を通して、安心して旅を楽しむための
ヒントをお届けします。みなさまに合う旅の形が見つかりますように。

イラストレーション 高村あゆみ

「行ける旅」から、「行きたい旅」へ

武雄アジア大学 客員教員 中村 敏

変わりゆく「旅」へのまなざし

わが国では1990年代半ばより、公共建築物や交通機関におけるユニバーサルデザインの導入が本格化しました。2005年には、心理的障壁を含む社会全体のバリア解消を目指す「ユニバーサルデザイン政策大綱」が策定されています。観光分野においても、2006年成り立の「観光立国推進基本法」や2007年度以降の「観光立国推進基本計画」において、年齢や障害の有無にかかわらず誰もが気兼ねなく参加できる旅行、すなわち「ユニバーサルツーリズム」を推進する方針が明記されました。

これまで、多くの障害者にとっての「旅行」は、楽しみよりも不安や諦めが勝るものでした。「家族に迷惑をかけるのではないか」「車椅子で入れる店はあるだろうか」——そんな心理的なハードルが、玄関のドアを重くしていた時代が長く続い

てきました。

しかし今、その風向きは確実に変わりつつあります。超高齢社会の到来もあり、これまで旅行を控えていた方々を支えるユニバーサルツーリズムは、これからの観光産業を牽引する強力な成長戦略としても期待されています。今月号の特集では、ユニバーサルツーリズムの基本理念や、地域ぐるみで進められている先進的な取り組みについて掘り下げます。

現地サポートが旅を変える

地域における旅先での介助を行う先駆的な活動は、1999年に設立された「旅とぴあ北海道」（2001年NPO法人化）にまで遡ります。以降、全国各地でNPO等による小規模な旅行介助が始まりました。

代表的な事例として、2002年に全国初の案内所機能を備えた「伊勢志摩バ

リアフリーツアーセンター」や、2009年に開設された「神戸ユニバーサルツーリズムセンター」が挙げられます。

この伊勢志摩と神戸がそれぞれ事務局となる「日本バリアフリー観光推進機構」と「日本ユニバーサルツーリズム推進ネットワーク」が中心となり、全国各地の団体とのネットワークが構築されてきました。2021年の観光庁の調査では、こうした相談窓口は全国57カ所にまで広がっています。各地のセンターが提供するサポートは多岐にわたりますが、共通しているのは、障害者やその家族が旅先で直面する「入浴・移動・食事・排泄」といった切実な課題を、現地の知見で解決していく仕組みです。

こうしたセンターを活用する最大のメリットは、「全行程への介助者同行」から「現地での部分的な介助」へのシフトにあります。これにより、介助者の交通費や宿泊費といったコストを大幅に削減でき